

「平成29年5月1日に思う」

“「弱い絆」の効力”という言葉をはじめて耳にしました。これは、全国町村会が発行する町村週報(2月13日2990号)に掲載されていた東京大学名誉教授大森 彌(おおもり わたる)氏のコラムのタイトルです。

大森氏のメッセージには、いつも深い感銘を受けていますが、今回は、米国の社会学のある教授が共同体の中での情報の伝播に関する研究で、『家族や親友、職場の仲間といった社会的に強いつながりを持つ人びとよりも、友達の友達やちょっとした知り合いなど、社会的なつながりが弱い人びとのほうが、自分にとって新しく価値の高い情報をもたらしてくれる可能性が高い』、そして、強い絆を持つグループは、『関係が緊密であるがゆえに外部と遮断されがちで、新規の情報が入ってきにくい』『むしろ弱いつながりが新しいアイデアや重要な情報をもたらしてくれる』という説を紹介しています。

大森氏は続けて、『弱い絆で結ばれている外の人材が地域活性化のヒントの源泉になることは稀ではない』と。さらに『絆は強弱ともにあったほうがいい』と指摘しています。

うーん。なるほど。考えさせられます。皆さんは、どう思われますか。

新年度にはいりました。おおいに“強弱の絆”を「都市にはない豊かな暮らしの実現」に、活かしてみたいと思います。

町村週報（平成29年2月13日2990号） コラム「弱い絆」の効用

<http://www.zck.or.jp/shuhou/2990.pdf>